

7 Research in English for Specific Purposes

特定の目的のための英語の研究



1. 著者紹介

2. 概要

- 2.1 What is ESP? ESP とは何か
- 2.2 ESP and Genre ESP とジャンル
- 2.3 ESP and Corpus Studies ESP とコーパス研究
- 2.4 ESP and English as a Lingua Franca ESP と国際共通語としての英語
- 2.5 ESP and Advanced Academic Literacies ESP と高度な学術リテラシー
- 2.6 ESP and Identity ESP とアイデンティティ
- 2.7 ESP and Ethnographic Approaches ESP と民族学的アプローチ
- 2.8 Conclusion and Future Directions まとめと今後の方向性

3. 発表後、話し合ったこと

1. 著者紹介

Brian Paltridge (ブライアン・パルトリッジ)

オーストラリア、ニュージーランド、イタリアで第二言語としての英語を教え、国際的にピアレビューの雑誌等に幅広く出版している。第二言語の教育と学習、言語カリキュラムの設計と方法論、研究方法、談話分析、専門英語、アカデミックライティングが専門で、現在はシドニー大学大学院で教鞭をとっている。

研究関心は、主に他言語話者への英語教育で、特に学術目的の英語に注目している。

主な著書としては以下のものが挙げられる。

- Paltridge, B., Starfield, S., Tardy, C. (2016). *Ethnographic perspectives on academic writing*. Oxford: Oxford University Press. 「アカデミックライティングにおける民族学的視点」
- Paltridge, B., Starfield, S. (2016). *Getting published in academic journals: Navigating the publication process*. Ann Arbor: University of Michigan Press. 「学術雑誌への掲載を目指して」
- Paltridge, B. (2012). *Discourse analysis: an introduction (2nd edition)*. London: Bloomsbury. 談話分析
- Paltridge, B., Harbon, L., Hirsh, D., Shen, H., Stevenson, M., Phakiti, A., Woodrow, L. (2009). *Teaching Academic Writing: An Introduction for Teachers of Second Language Writers*. Ann Arbor, USA: University of Michigan Press. 「アカデミックライティングの教授」
- Paltridge, B., Starfield, S. (2007). *Thesis and Dissertation Writing in a Second Language: A Handbook for Supervisors*. London: RoutledgeFalmer imprint of Taylor & Francis. 「第二言語の論文と論文執筆」
- Paltridge, B. (2001). *Genre and the Language Learning Classroom*. United States: University of Michigan Press. 「ジャンルと言語学習の教室」

【注意 閲覧者の方へ】

この資料は、東京学芸大学大学院教育学研究科国語教育専攻日本語教育コースの「日本語教育研究法B」(担当:南浦 涼介) ので取り扱ったHinkel (ed) (2011). *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning*のChapter1の発表資料です。教育的価値、資料的価値としてウェブ掲載をしていますが、いわゆる「論文」ではありませんので、論文への引用等をご遠慮ください。また、分析対象の著作権は著作者、資料文書の著作権は発表者に記しますので、無断転載をご遠慮ください。質問については東京学芸大学南浦研究室 (<http://www.u-gakugei.ac.jp/~minalabo/>) までお願いします。

Sue Starfield (スー・スターフィールド)

UNSW (ニューサウスウェールズ) 大学の教育学部の教授でラーニングセンターのディレクターも務める。専門とする分野は、アカデミックリテラシー、博士論文のためのライティング、出版のためのライティング、アカデミックライティングのアイデンティティ、民族学的研究方法と言語政策である。

主な著書としては以下のものが挙げられる。

Ravelli, L. J., Paltridge, B., & Starfield, S., (ed.), 2014, *Doctoral Writing in the Creative and Performing Arts*, Libri Pub Limited 「創造的で芸術的な博士論文の執筆」

Paltridge, B. & Starfield S, (ed.), 2013, *The Handbook of English for Specific Purposes*, Wiley-Blackwell 「特定の目的のための英語のハンドブック」

2. 概要

2.1 ESP とは何か??

日本で最初の ESP の一般書であるという深山晶子編 (2000) 「ESP の理論と実践」では、先行研究の定義を分析し、批判検討した上で、ESP を以下のように定義づけている。

ESP (English for Specific Purposes) とは「それぞれの学問領域や職域には固有のニーズが存在し、そのニーズによって同質性が認知され、異質性も生じてくる。そして、同質性が認知された各専門領域内では『ディスコース・コミュニティー』集団が形成され、その目的を達成しようとする。その場合、各集団の内外において明確かつ具体的目標を持って英語が使用される。その際の言語研究および言語教育」をいう。



⇒ それぞれの分野・領域で使われる英語は異なる。
学習者の目指すところによって教育も変わっていかなければならない。

では、ESP 研究は具体的に何を研究し、どう生かされ、今後どう発展していくべきか。本発表では、以下の 6 つの点からその全体像を明らかにし、日本語教育における JSP 研究とはなにか探ることを目的とする。

- ・ジャンル分析
- ・コーパスベースの研究
- ・Lingua Franca としての英語の広がり と ESP 研究
- ・高度な学術リテラシーを目指した ESP 研究 EAP (English for Academic Purpose) との関連
- ・学習者のアイデンティティ コミュニティーへの参加と言語使用
- ・ESP 研究における ethnographic research (民族学的方法) の導入

2.2 ESP and Genre ESP とジャンル

ジャンル分析とは何か？

Dudley-Evans と St John (1998)

特定のジャンルやテキストタイプにおける言語的、構造的規則とそれらが談話コミュニティ内で果たす役割の研究 ※談話分析…談話の特徴の考察



研究の焦点

マクロレベルのテキストの記述（話の進め方、構成）

特定のジャンルの文脈における文章と句レベルの選択

Swales (1990)

これらの影響は、状況特有のスキルとストラテジーの研究、言語プログラム開発への概念的機能的アプローチ、談話分析、社会言語学、構成研究、文化人類学分野の研究、言語と認知と様々な分野に及んでいる。

したがって、ESP のジャンル分析は、「特定の修辭的ニーズ（？）に応じて進化したコミュニケーションの目標を達成する手段」として、ジャンルの説明のためにさまざまな分野の範囲から抽出し、なぜ、各ジャンルが現在のように形作られているのか、そしてどのように特定のコミュニケーション上の目標を達成するのかについて、説明を試みている。

Devitt (2004)

ジャンルユーザー間の適合性は「ジャンルの事実」であり、制約と選択どちらも必要な正の要素で、選択が正しくて、制約が悪いというわけではなく、ジャンルの記述と教授にはどちらも重要である。

研究例

Paltridge(2000) 複数のジャンルを取り入れたアカデミック・エッセイ

Tardy (2008) 口頭/聴覚、文章、視覚のジャンル間の関係と多様性を引き出すシステムベース

Molle and Prior (2008) ジャンルベースのニーズ分析

Bhatia (2008) 専門ジャンルの典型的な特徴とその本質の分析

Hyon (2008) 「見通し外」と呼ばれるジャンル：大学内の昇進・在籍の報告

Samraj and Monk (2008) 「半閉塞」のジャンル：米国の大学院の入学目的の文書

Giannoni (2008a) 英文ジャーナルにおける論説の研究

Dressen-Hammoua (2008) 初心者から専門家までへの変貌 ジャンルの習得の方法

2.3 ESP and Corpus Studies

ESP 研究を行うにあたって欠かせないのが、コーパスである。コーパスとは、実際に書かれたり話されたりした言語をコンピューター上で、利用可能にしたテキストの集合体であり、英語に限らず日本語でもこれまでに多くのコーパスが開発されている。

表1 英語（教育）研究、日本語（教育）研究における代表的コーパス

コーパス名	機関	特徴
MICASE	ミシガン大学	話し言葉、特にスピーチなど一方向的な
BASE Plus	ウォーリック大学 レディング大学	160の講義と40のセミナーから得られたコーパス 話し言葉
BAWE Plus	ウォーリック大学 レディング大学	500語から5000語のレポートおよび論文から構築 4つの分野（芸術・人文、社会、生命、物理）と4つのレベル（学部～教師）からなる
TOEFL SWALC	ETS	話し言葉、書き言葉ともにある ビジネス～日常
BCCWJ	国立国語研究所	母語話者の書き言葉
CSJ	国立国語研究所	母語話者の話し言葉
KY コーパス	鎌田・山内	日本語学習者の話し言葉（OPIテスト時）

コーパスによって得られたもの

アカデミックワードリスト Coxhead(2000)←より局所的に専門に特化したものにすべきという批判

コーパス研究の例

Harwood (2005,2006) 学術執筆における人称代名詞の使用に関する研究

Hyland (2008) Swales の応用言語学分野の書き方の研究

Bhatia and Gotti (2006) 専門ジャンルの探求

Flowerdew and Gotti (2006) 専門談話の研究

Bargiela-Chiappini and Nikerson (1999) 執筆業：ジャンル、メディアと談話

Trosberg (2000) 専門談話の分析

これらの研究では、例えば、ノーベル賞講演会、税務ウェブサイト、差別禁止法案、弁護士意見、不動産談話、多国籍企業の電子メール、販売手紙、ビジネスファックス、企業報告書、法廷談話が含まれている。

コーパス研究への批判

Flowerdew (2005)

- ・コーパスの研究が、言語使用のボトムアップ記述を霧化させることにつながる。
- ・コーパス研究はテキストの文脈的側面を考慮しない。



これに対して…

Harwood (2006) と Tribble (2002)

- ・付随する情報の開示を行うことで文脈的側面を補うことができる。
- ・コーパスが現状を批判的に見て捉えたりするのに役立つかどうか課題

2.4 ESP and English as a Lingua Franca

ESP は Lingua Franca としての英語とも密接に関わっている。国際ビジネスの言語、国際会議の言語、国際教育と研究の言語、国際通信ネットワークの言語、国際旅行者の言語で、多くの場合、どちらの話者の母国語でもないが、使用する可能性の高い言語である。

ELBP (English as a Lingua franca for Business Purposes) 研究の動向 Nickerson (2005)

①孤立した言語の考察 (言葉そのもの)

→テキストの書き方や発話に影響を及ぼす組織や文化的要因を考慮した分析への移行 (言語使用の背景)

②語学スキル (どのくらい話せるか)

→ネイティブスピーカーであるかどうかを無視したビジネスコミュニケーションに効果的な戦略 (どのように話すか)

研究例 Charles (1996) ビジネス交渉

Planken (2005) 非ネイティブスピーカー販売交渉

Bargiela-Chiappini, Harris (1997) イタリアとイギリスのビジネスミーティング

Rogerson-Revell (1999) 経営会議

Poncini (2004) 国際的なディストリビューターとの企業会議

Gimene (2002) 多国籍企業での電子メールやファックスの利用に関する研究

Planken and Nickerson (2009) ビジネス英語の形成と使用者のレベル

EFL への批判

Maley (2007)

- ・統計的に証明されておらず、実用的に機能しない
- ・非ネイティブスピーカーの英語使用に寛容な態度の促進
(ネイティブスピーカーの英語使用が唯一のものではないし、他のどの種よりも優れているというわけでもない。)
- ・非ネイティブはアイデンティティのバッジとしての英語の使用において、より強健に、積極的に、誇りを持つべきだ



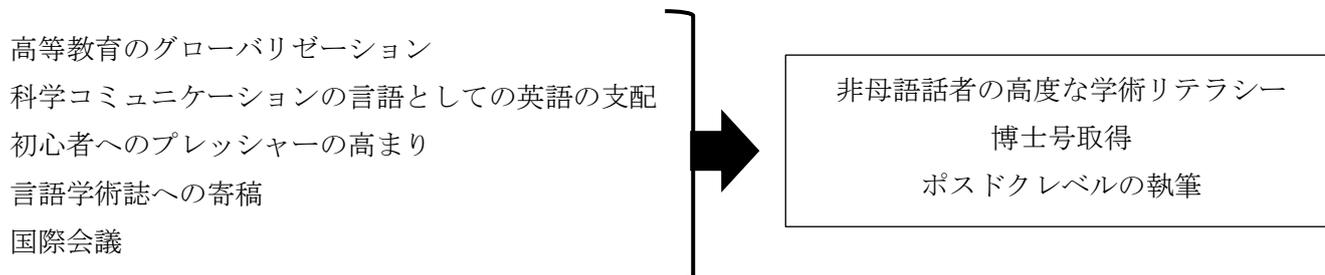
ELFA コーパス

広範囲にわたる言語学的背景を持つ講演者による講義、プレゼンテーション、セミナー、論文および会議の議論を含む

Mauranen (2006)

このようなプロジェクトでは、第二言語の話者を単純に「学習者」として構築することなく、教室外の ESP での言語使用に関する洞察を得ることができる。

2.5 ESP and Advanced Academic Literacies



この研究の多くは、個々の学者が高度な学術リテラシーを向上させている文脈についてのより深い記述を提供するために、質的方法を用いる事例研究の形をとっている。

研究例

Li (2006) 中国の物理学の博士課程の学生のケーススタディ

"international"ジャーナルに掲載しようという試みが、「社会政治的作品」としての最終的な完成版がその学生と指導教員、雑誌編集者、査読者による複数の交渉によって形作られたものであると証明した。

Lillis and Curry (2006) 東欧心理学者の民族誌的研究

英文学術誌に掲載しようとする試みを仲介した「リテラシーブローカー」(編集者、査読者、学問界の友人および同僚)の広範な利用を明らかにしている。

両方の方法論は、執筆者が新しい学術討論コミュニティへの参入は、学問的な話し合いのきわめて局所的であり、複雑な交渉であることを確証している。

この章で検討した研究は、ESP 実践者にとって、周辺学者が直面している言語的挑戦をより複雑な社会政治的文脈の中に位置づけ、出版だけでなく「英語だけの研究世界の受容」を捜し求めるという複雑なアイデンティティの交渉(以下の章を参照)を証明している。

2.6 ESP and Identity

初期の ESP 研究 狭義に定義された目標状況(前提情報、語学学習の必要性、主観的ニーズ、欠如)

Benesch (2001) 社会問題とアイデンティティ (ジェンダー、階級レース、権力関係)

Norton (2000) 学習者のアイデンティティと投資、想像上のコミュニティ

Belcher and Lukkarila (2011)

学習者のより豊かな概念化、学習者が複数の文脈で果たすことができる複数の役割、学習者の位置づけ現在および想像される将来の共同体における学習者自身の合法的で周縁的でより中心的な参加の構想



- ・学部、大学院、および進学学術の分野における EAP の分野の中で行われてきた
- ・書き言葉と話し言葉の両方
- ・「新規参入者」(初心者)を対象

これらの新規参入者は、英語を母国語としない人であることが多く、多くの研究では、合法的ではない話者/著者として、英語の第二言語の話者として、極端な場合には、「剽窃者」と呼ばれる。しかし、学術コミュニティの国際化に伴い、非ネイティブスピーカーの英語を視聴することになり、コミュニティの実践の枠組みの中で、「ネイティブスピーカーの学生やインストラクターは、単なる支配的なグループ、目標、または規範ではなく、ますます異種コミュニティに疎かにされる必要がある周辺参加者のグループ」となっていくと指摘されている。(Morita,2004)

Clark and Ivanic (1997)、Ivanic (1998) 書き手のアイデンティティ
Hyland (2005) 態度とエンゲージメントに関する研究

特定の状況下で交渉された意味に焦点を当て、特に、学問的な言説が個人的ではなく、「書き手は複雑な文章活動に参加し、執筆の実践に影響を与える生活や歴史を持つ社会的、政治的な存在」であることを示している。学術執筆における筆者自身の規律は最近、談話における自己形成の構成的性質についてのポストモダニスト的思考からの洞察に影響を受け、関心の焦点となっている。

Starfield (2002,2004)、Starfield and Ravelli (2006) Ivanic の執筆アイデンティティの概念化

自伝的自己 執筆の過程で生み出されたテキストの自己 権威ある自己	}	学問的執筆において相互作用する
--	---	-----------------

Ouellette (2008) 見知らぬ盗作
Abasi and Akbari (2008)

EAP の実践者にとって興味深いのは、学生が新しい文脈で「合法的」に見えるように苦勞したときに、その剽窃に訴える学生を学問的文脈と課題の要求によって配置する方法です。

ビジネスコミュニケーションにおけるアイデンティティ

Planken (2005) ELF セールス・ネゴシエーションにおける関係管理の検討

経験豊富な交渉者がどのようにして対話者との専門的な共通点を効果的に強調しているか

Jensen (2009) ビジネス・コンテキストにおける電子メール・ネゴシエーションにおける談話戦略の研究

Hyland のスタンスとエンゲージメントを利用して、一連の電子メール交換を通じて社会関係やアイデンティティがどのように構築され、交渉されたかを検証している

このアイデンティティに関する文献から明らかに浮かび上がっているのは、非ネイティブの執筆者や英語の話者が、ステレオタイプ的な見方をする傾向があるアカデミーの様々な談話によって批判を受けているということ。Belcher と Lukkarila (2011) は、**学習者の再概念化**が、EAP とより広い ESP 分野の追求にふさわしい手段として現れることを示唆している。

2.7 ESP and Ethnographic Approaches



研究例

Northcott (2001) MBA 教室の研究

Cheng and Mok (2008) コンサルタント会社のオフィスで 6 日間の集中観察 など

これらの研究はどれも、Lillis (2008) がエスノグラフィーの中心と見なしている、時間の経過とともに持続的関与を伴うようではないが、厳しい制限があることは否めない。その中でも収集されるデータが豊富であり、ユニークな視点が得られることに意味がある。

Juzwik, Curcic, Wolbers, Moxley, Dimling and Shankland (2006)

21 世紀初めに文章や社会慣行を中心に研究が行われていることを発見

→EAP とビジネスコミュニケーションの中でより質的な傾向の方法論の増加

ジャンル研究やコーパス研究が社会文化的背景や参加者の視点をより深く探究することで恩恵を受けることができることを実証した。

Swales (1998a, 1998b)

「より厚い」文脈を提供するような学術的な文章を研究する枠組みの開発

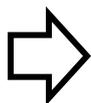
「textography」…インタビュー、観察、コメントーション分析などの民族誌技術とテキスト分析の要素を組み合わせたジャンル分析へのアプローチ

Paltridge (2008) 全く異なる 3 つのテキストプロジェクトの記述

注釈の作成に関する研究

2 つの主要な中国の大学の英語の writing 要素の textography

「textographers」になることを奨励する最新の学術ライティングコース



テキスト分析と民族学的方法論の融合

Dressen-Hammouda (2008) 学問的社会化研究とより伝統的なジャンル研究の橋渡し

フィールドワークに関する初心者の地質学者の執筆の開発

専門家のように書くために学生が習得しなければならない複数の複雑な「記号的リソース」を理解するためのインタビューベースの現代的なフィールド・ライティング習慣の textography

Starfield (2001,2002,2004) 南アフリカの黒人の第二言語学者

白人のみの大学のアパルトヘイトスクールから、幅広い観察、学生と教師との十分なインタビュー、収集と分析を含むさまざまなデータソースが三角測量された

これらのバックグラウンドの学生がこの非常に不公平な文脈の中でどのように成功するかだけでなく、教師がアパルトヘイトの議論によってどのように位置づけられているかについての説明を作成するために、他の文書を分析した

談話コミュニティの概念の批判

Lillis (2008) 「方法」と「方法論」の区別

学術誌の ESP / EAP 研究の多くは、よりコンテキストデータを提供するために主にインタビューやテキスト収集を使用するため、「エスノグラフィーをメソッドとして」または「テキストの周りを話す」と特徴付けられる。「方法論としての民族誌」には、文脈や参加者、複数の情報源からのデータの収集との長期にわたる継続的な関与が必要である。

2.8 Conclusion and Future Directions

Pennycook (2007) は、グローバル化の相互関係と英語の質的力と象徴力を批判的に反映している。

「英語はグローバル化のプロセスに密接に結びついています：脅威、欲望、破壊、機会の言語... 英語は、移住言語であり、流動性と固定性の両方を持つ言語であり、場所と社会関係の重要性に埋め込まれつつ移動する。英語は、文化的な流れ、想像したコミュニティの言語、そして洗練されたアイデンティティに縛られている。

この章では、ESP の研究、作成、指導の多様性と著者の関心に注目し、ESP の研究が文脈やコミュニティの概念を広げ、深化させ、文脈やコミュニティを探るためにより質的な研究アプローチを採用し、英語の "translocal" な役割に注目する方法を示してきた。Pennycook が私たちに助言するように、英語は予期せぬ結果を招くかもしれない方法で学習者と教師のアイデンティティを再形成する力を持っている。

Yongyan Li (2005,2006) 民族学的指向の事例研究

興味深いのは、彼女の研究動機である。彼女自身が中国の学者として英語で出版するというプレッシャーと、その文脈における EAP の教師としての仕事を経験したことである。したがって、彼女自身の成功した雑誌の出版は、「フィールドの権威ある会話に自分の声を加え、フィールドとその実践を変えるのを助ける」。

Bhatia (2008) 「複雑でダイナミックな多面的かつ多次元的分析枠組み」の提案

教室の理想と実践の現実との間にギャップがあると指摘した。

学習者のジャンル分析タスク、執筆作業、教室の交流場面、カリキュラム資料、学習者のリテラシー自伝、民族誌のインタビューなどのデータソースを使用することにより、ジャンル理論と記述、ESP のジャンルベースの教育の間の橋渡しがされる。

英語が非母語話者として国際共通語の英語話者の新しいコミュニティーよりはっきりと具現化する脅威、欲望、破壊、機会の矛盾した引き合いが、自身の目的のために英語を再構成し始めているところはどこにもない。(←???) この分野の研究は急速に成長し、その分野はその教育的含意を検討し始めたばかりである。また、コーパスの研究は、教育的決定に基づいた有用な経験的データを提供しているが、実践者や研究者は、英語の力によって形作られ、形作られている個々の学習者を見失わないようにする必要がある。

参考文献

深山晶子編 (2000) 「ESP の理論と実践」 三修社

3. 発表後、話し合ったこと

- ・ 談話…何を言ったのか／言説…なぜそれをその場で言ったのか (背景と文脈)

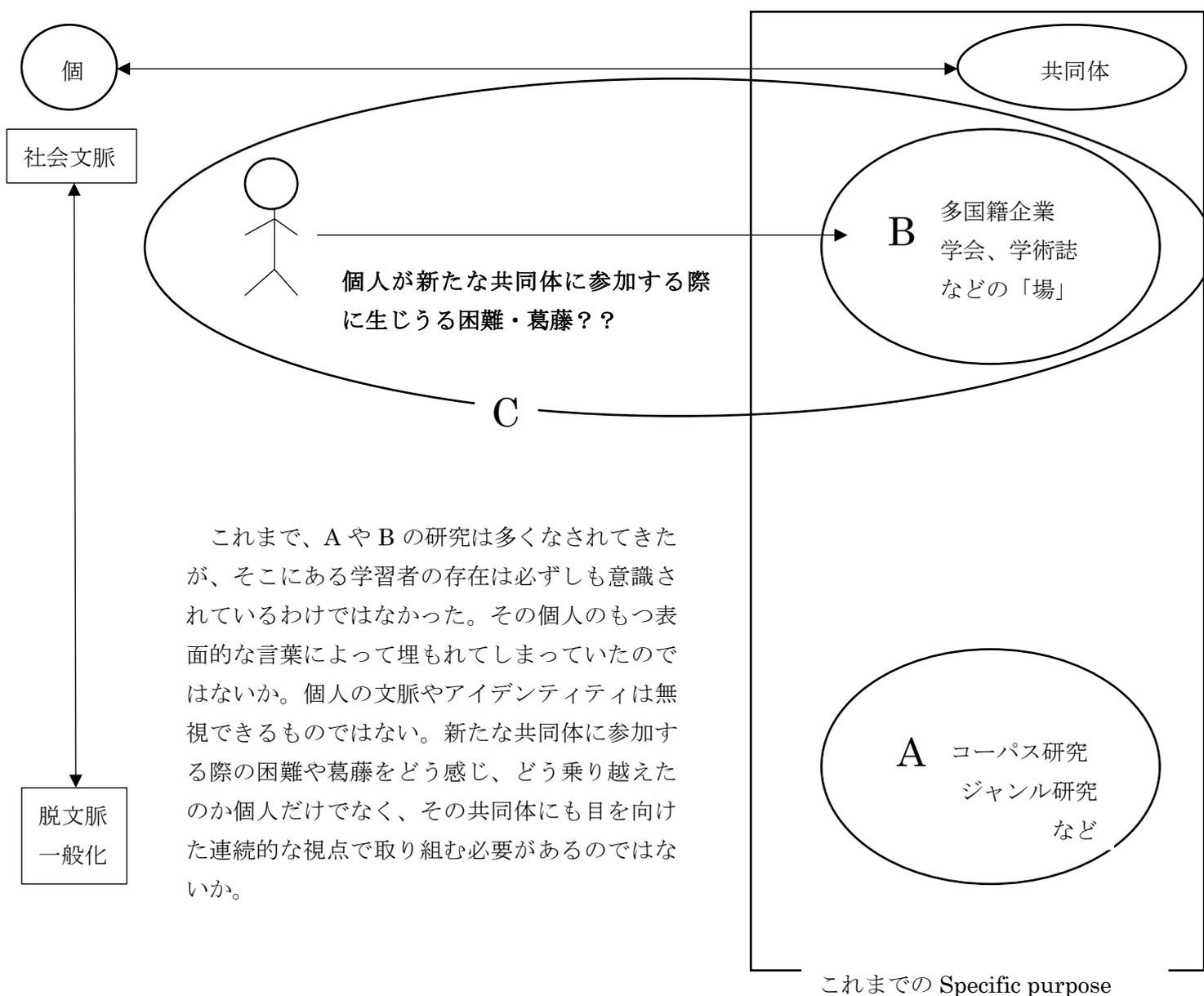


図1 Specific purpose の研究可能性